9～10世紀におけるイスラーム・ガラスの海上交易
―刻線カット装飾ガラス盤をめぐって―

真道　洋子

The Islamic Glass Trade by the Sea-route between the 9th and 10th Centuries
: Problem of Dish With Incised Cut Decoration

Youko SHINDO

9～10世紀におけるイスラーム・ガラスの海上交易は、中近東地域から東アフリカ、東南アジア、中国、日本にまで及んでいた。これまでに、濃青丸底瓶、貼付装飾瓶を取り上げ、イスラーム・ガラスの東漸の問題を考えてきたが、今回は、法門寺出土品を軸に、Rayaで発見された新資料を加え、刻線カット装飾盤について考察を行った。これらの資料を広大な交易圏の中で位置づけ、その技法、器形、文様の分析を行った結果、シーラーフ系商人による交易品と総括されていた商品の中にも相違があり、海上交易を考える上でのガラス器の有用性が明らかとされた。

キーワード：イスラーム・ガラス、刻線カット装飾、東西海上交易、法門寺、ラーヤ

The Islamic glass trade by the sea-route between the 9th and 10th century extended from the Middle Eastern region to East Africa, Southeast Asia, China and Japan. I have already discussed the eastward advance of the Islamic glass trade by taking up deep-blue round-based bottles and bottles with applied decoration. In this paper consideration on the dish with incised-cut decoration is given with the finds from the Famen Temple in China as the focus, and in addition the newly discovered artifacts from the Raya site are examined. As the result of the analysis of distribution, technique, shape and figure pattern of the materials, it is clear that there are differences in the commodites which have been regarded collectively as the trading commodities of the Sīrāf merchants, and the importance of glassware in the sea-route trade has been clarified.

key-word : Islamic glass, Incised decoration, sea-route, the Famen Temple, Raya

はじめに

9～10世紀の中近東地域におけるガラス器は、それ以前の地中海地域を中心としたローマ・ガラスの技術伝統とペルシャ地域を中心としたサーサーン・ガラスの技術伝統が、イスラームの元で融合され、発展した時期にあたる。それは、技術的な発展に止まらず、アッバース朝勢力下でイスラーム勢力が拡張し、イスラーム・ガラスの技術、職人、製品が広域に広がっていく拡大の時期であった。この時代のイスラーム・ガラスが、インド洋海域から東アジア地域にまで及んでいたことは、各地からの出土品が示している。

この時代、東アジア地域に至るインド洋海域の交易を担っていたのは、イランのSīrāf系商人であり、彼らの活動については、家島の膨大な研究がある（家島 1991, 1993）。その行動範囲は図1に示すように、東アフリカ沿岸部から中国にまで及んでおり、彼らが西から東へと運んだ商品の中にガラス器も含まれていたことは確実である。

中国の史書が示すように、その流入ルートについては、内陸アジアの諸オアシス都市を経る陸上ルートと東南アジア地域を経る海上ルートの両ルートが存在している。とくに、近年になって東南アジア地域の港湾遺跡の発掘調査が進むに連れ、海上ルートによる経路が重要であったことが認識されてきている（An 1996 ; Bronson 1996 ; 真道 2000a）。

9～10世紀の東西海上交易活動において、イスラーム商人の活動を示す遺跡からは、Sīrāf系商人の足跡を示す青釉陶器とイスラーム・ガラスが共伴している例が多い。青釉陶器の場合は、船乗りの実用品もしくは内容物の大型容器にすぎず、大きな年代差は認められない。しかし、容器そのものが商品であり、内容物の容器であってもそれが高級品であるガラス器の場合は、様式的にも年代的にも相違が見られる。このことは、交易内容の変化を考古学的に考察するに値する事実である。

西アジア考古学　第2号　2001年　69-82頁
©日本西アジア考古学会

中近東地域で製作されたガラス器個々の中国流入の問題に関しては、これまでに、安（An 1991, 1996)、谷一（谷一 1993)、Kröger（Kröger 1998, 1999)、Moore（Moore 1998）などの研究者によって論じられてきた。筆者もこれまでに、9～10世紀におけるイスラーム・ガラスの実態を解明するという観点から、海上交易ルートにおけるイスラーム・ガラスの流通の問題に関して、濃青丸底瓶、貼付装飾瓶について取り上げた(真道 1998a, 2000a)。今回は、刻線カット装飾盤に着目し、9～10世紀におけるイスラーム・ガラス交易の交易圏全体の中で刻線カット装飾ガラスを位置付け、中国法門寺から出土した6点の盤の様式分析を行い、イスラームの海上交易活動の中で扱われたガラス器について考える。

9～10世紀におけるイスラーム・ガラスの概要

発掘報告書によれば、Qaṣr al-Hayr, al-Minā, Raqqa, Amman, Jerusalem, Khirbēt al-Mafjar, Caesaria, Fusṭāṭ, Rāya, Bādi', Sāmarrā, Nippūr, Sīrāf, Gurgan, Sūsa, Nishapūr, Sohār などの遺跡から多量のイスラーム・ガラスの出土が報告されている（図1参照)。これら以外にも、中近東地域のイスラーム時代のすべての遺跡からガラス器が出土していることは言うまでもない。しかし、その全体像と傾向を把握するためには相当量の出土点数とその詳細な報告が成されていなければならない。これまでに発掘されている9～10世紀の中近東地域の遺跡の中で、ガラスに関する詳細な報告がある遺跡と年代考証に有効な遺跡は次の通りである。

1．Raqqa

Raqqa は、ユーフラテス川上流に近い北東シリアに位置し、639/40年にアラブに征服された。カリフ Hārūn al-Rashīd は、それまでの都市部に隣接する Rafika 地区に新たな都城を造営し、796年から808年にかけて短期間アッバース朝の首都として機能した。その後、12世紀までビザンツに対抗する上での重要な拠点であった。

1950年代には、Nassib Saliby によって Rafika 地区の宮殿址が発掘され、ラスター彩、刻線カットなどの初期イスラーム・ガラスの高品質な装飾ガラスが発見された（Nassib 1954-55)。さらに、1982-1993年にドイツ隊が発掘を行なった結果、ガラス製造址を含むテルが発見され、以降、Henderson が中心となってガラス工房の発掘調査を継続している。出土ガラスの全様はまだ明らかとされていないが、原料を含む出土資料の成分分析が積極的に行われている（Henderson 1996)。

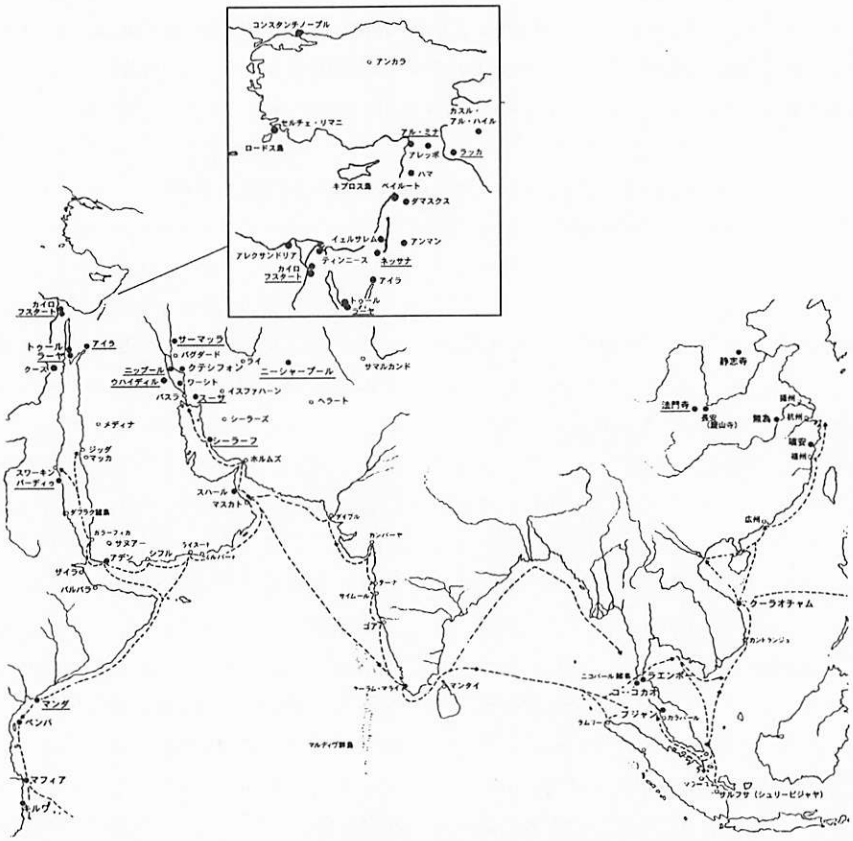


図1　9～10世紀の主要都市と遺跡（ルートは家島1993参照）
（下線は刻線カット装飾片出土遺跡）

2．Sāmarrā

現在のバグダードの北125 kmに位置し、836-892（AH221-279）年の間8人のカリフの居城があり、アッバース朝の首都として機能した。最初に、Mu'taṣimがチグリス河の西岸、現代のSāmarrāの北の地を首都に選定し、Mutawakkilがさらに北方に新しい都市を建設した。続くMu'tamidの治世に大部分の人がこの町を去り、892年の彼の死で、この都市は放棄される。南部のQādisīyyaは13世紀の終わりもしくは14世紀初頃まで存続するが、主要な都市部は9～10世紀のものである。

1911-13年、1936-39年にイラク側によって発掘が行われ、ガラスに関しては、Lammが詳細な研究を行っている。この出土品はほぼ9世紀に限定され、様々な遺跡の出土品の年代考証にも利用されている。出土ガラスでは、モザイク・ガラスやカット装飾ガラスなどの高級ガラスのほか、ビーカー、小瓶、丸底瓶などの粗製無装飾ガラスなども多く、ガラス器が生活の中に普及していたことがわかる（Lamm 1928）。

1983-84、1986、1989年には、Northedgeが中心となって発掘を行い、Qādisīyya地区でガラス工房があるテルを発見している[1]（Northedge 1987：149-151）。

3．Nishapūr

Nishapūrは、サーサーン朝時代に建設された都市であり、イスラームの東の拠点として初期アッバース朝時代に総督が居住していた。9世紀以降、Tahrīd朝、Saffarīd朝、Ghazna朝、Seljūk朝と支配王朝が変わっても、Nishapūrはそれぞれの王朝の中心都市として繁栄を続けた。しかし、12世紀には度重なる政争と地震、そして、1221年のモンゴルの侵攻によって都市は荒廃し、その重要性は喪失した。

ガラスに関しては、Metropolitan美術館によって行われた発掘調査で出土したほぼ全資料についてKrögerがカタログしており、近年のイスラーム・ガラス研究の重要資料となっている。中心は9～11世紀で、円筒形ビーカー、各種瓶、カットおよび型装飾ガラスの出土量が多く、ラスター彩、刻線カット装飾は希少である（Kröger 1995）。

4．Fusṭāṭ

Fusṭāṭは、641年にアラブの侵攻によってナイル川の分岐点に建設され、翌年のAlexandria攻略後エジプトの首都となった。行政機能がAskar、Qata'、Qāhiraと北方に移行した後も、商工業・学問・宗教の中心であり続け、イスラーム屈指の大都市として繁栄した。12世紀末にラテン王国の侵攻に際し灰燼に帰した後、Ṣalāh al-Dīnによって再興されるが、14世紀末にはペストの流行によって捨て去られ、以降、廃墟と化した。

20世紀初頭からエジプト考古庁およびイスラーム芸術博物館が中心となり発掘調査が開始され、1965年からアメリカ隊、1978年から日本隊、1983年からフランス隊が発掘を行っている（櫻井・川床 1992）。ガラスに関しては、Pinder-Wilson（Pinder-Wilson 1973, 1987）、真道（真道 1992；Shindo 2000）、Foy（Foy 1999）がそれぞれ各調査隊の出土ガラスについて詳細な報告・研究を行っている。

大商業都市としてあらゆる商品が集積していたこの遺跡から出土するガラスは、イスラーム時代のあらゆる時代、地域の製品を含んでいると言って過言ではなく、種類、品質についても多岐に亘っている。したがって、この中から9～10世紀の遺物を抽出するには、詳細な層位的検討と他遺跡出土品との比較が必要である。

5．Rāya

シナイ半島の先端に近く、現在のṬūr市の南約8 kmに位置するRāyaは、Old Ṭūrと位置づけられ、9～11世紀を中心に繁栄し、12世紀で放棄された港湾都市である。1998年から中近東文化センターが発掘を行っており、ビザンツ様式の城塞内部に9世紀以前に建立されたと考えられるモスクが発見され、シナイ半島のイスラーム化の歴史に新たな事実を提供した（川床 1999, 2000）。

出土ガラスは、9～12世紀を中心としており、各種ラスター、刻線カット、ピンサー、型などの装飾ガラスをはじめ、ビーカーや瓶類などの無装飾ガラスを含め、大型器片のみでも現在までで8000点を超える出土点数がある（真道 2000b）。遺跡はほとんど撹乱を受けておらず、考古学的な資料価値が極めて高い。

6．Sīrāf

Sīrāfは、8世紀半ば頃から10世紀後半までの間、ペルシャ湾岸の最大の海運及び航海活動上の最大の港市であった。そして、この都市の出身者達は、インド洋海域全域で活発な活動を行っていた。しかし、978年にこの地を襲った大地震で都市が破壊され、さらに、エジプトにおけるファーティマ朝の成立などの影響で国際商業ルートの中心がペルシャ湾から紅海に移り、Sīrāfは衰退した。Whitehouseが1967～72年にかけて発掘調査を行っており、モスクや多数の住居祉を発見している（Whitehouse 1968, 1969, 1970, 1971, 1972, 1973）。

ガラスに関しては、正式報告書は刊行されていないが、脚付ランプ、型装飾小瓶、インク壺などの他、多数のガラス器片が出土している。

イスラーム・ガラスの遠隔地交易

1．東アフリカ沿岸部

金や象牙をもとめて、イラン系の商人を中心にイスラームの商人達がアフリカ大陸東岸部に進出していたことは、Lamu, Pate, Kilwaなどの年代記からも知ることができる。伝説によると、696年にOmanの2王子がウマイヤの圧

政から逃れてきたのが最初で、この後、シリア、ペルシャ、アラビアなどからの移住が続いたとある（Chittick 1974)。実際に、Manda、Kilwa、Gedi、Monbasa、Mafia など多くのイスラーム関連の遺跡が存在し、出土する遺物は多数のイスラーム商人のコロニーが存在を示している。この中で、9～10世紀の層が確認されるのは、Manda と Kilwa である。

Manda は、Lamm 諸島の中のひとつで、Kenya 海岸に近接している。Chittick によって発掘され、9世紀半ばから19世紀までが6時期に区分されている。9世紀半ばから11世紀初めの第1期の層からイスラーム・ガラスが多数出土しており、Siraf との類似が指摘されている（Morrison 1984：159)。旋盤カット装飾が多数出土しているほか、刻線カット装飾の小片が1点、型装飾、ピンサー装飾などのほか、無装飾の円筒形ビーカー、丸底瓶、小瓶類、ランプの把手などが出土している。

Kilwa は、年代記によると957年に Sīrāz からの移住民が建設したとある。12世紀以降、Mogadish の金貿易を独占することで勢力を伸張し、16世紀にポルトガルによって征服されるまで繁栄した。

1958-61年にChittickによって発掘調査が行われ、9～19世紀までの時代の層序が確認された。Alī Ibn al-Ḥasan朝の成立以前の800-1150年を第1期、Alī Ibn al-Ḥasan 朝時代の1150-1300年を第2期、Abū al-Mawahib 朝時代の1300-1550年を第3期として、区分されている（Chittick 1974)。ガラス器は、第1期の出土量が多い。色調は多様で、型装飾、カット装飾小瓶（Molar Flask)、無装飾の円筒形ビーカー、大型瓶、小瓶類などが出土している。

2．マレー半島

タイのマレー半島中央部の対岸に位置する Laem Pho と Ko Kho Khao の2つの港の遺跡からは、中近東地域の製品および唐末の磁器が豊富に出土している。これは、少なくとも800年から900年の間、マラッカ海峡を通過せず、マレー半島を横断する中近東と中国を結ぶ国際商業ルートが存在したことを示している。

Bronson によると、ガラス器は90%以上がカップと小瓶であり、Laem Pho から Sāmarrā 様式の小瓶、Ko Kho Khao からは、ラスター彩、型などの装飾ガラスなどが出土している（Bronson 1996：187-189；Srisuchat 1996：253-256)。

マレー半島西岸の Bujan 渓谷でも多量の中近東地域のガラスが発見されている。出土品の Kedah には、全体復元可能の金魚鉢型のランプの他、型装飾、貼付装飾、紐装飾、カット装飾などの装飾片を含む多量の容器片が見られる。また、ガラス原料カレットも発見されており、製品だけではなく、原料も移動していたこと示している（Lamb 1965, 1966)。

3．中部ベトナム

Culao Cham は、ベトナム中部の都市ホイアンの東20km の海中に浮かぶ島で、9～10世紀にチャンパ王国の東西交易上の重要な拠点であった港が存在している[2]。1990年以来、ハノイ大学、および、ホイアン遺跡保存管理センターがホイラン島バイラン地区の考古学的調査を行っており、1998年と1999年の調査で9世紀に年代付けられるイスラーム・ガラスが発見された。

その中には、後期ローマから初期イスラームにかけての特徴を示す折り返し口縁、初期イスラーム時代の貼付、ラスター彩、型装飾ガラスが存在する。とくに、円盤状の貼付文が施された胴部片は、中国の法門寺出土品と共通するもので、その流入経路を示すものとして重要である（真道 2000a)。

4．中国

中国では大寺院の仏塔基壇下の地下宮や身分高い者の墳墓などからイスラーム・ガラスが発見されている。これらは、品質が高く、年代の下限も設定できることから重要である。中でも、9世紀末に閉じられた法門寺塔基と10世紀末に閉じられた静志寺から複数のイスラーム・ガラスが出土している。

法門寺は、陝西省扶風県西安より北へ約100km の地に造営され、874年以来開帳されていない。1987年2月に発掘調査が開始され、塔基壇から金銀銅器121件、ガラス器20件（盤13件、瓶1件、杯2件、碗1件、茶托1件）などが発見された。

大半のガラスは後室より出土しており、後室西南角の木箱内に茶托、杯、茶碗、盤（10件）が収められていた（安 1990：1116)[3]。イスラーム・ガラスに関しては、貼付装飾瓶、刻線カット装飾盤、ラスター彩装飾碗、ピンサー装飾ビーカーなど、9世紀のイスラーム・ガラスの最高水準である（安 1990：1116-1118，1991：123-130)。法門寺の奉納品の最終埋納年は874年であるが、ガラス器に関しては、様式および中近東地域での出土例との比較、とくに、9世紀後半以降に大流行する旋盤による線カット装飾が含まれていないことから、9世紀前半から半ばには中国に流入していたと考えられる[4]。

河北省定県静志寺真身舎利塔は、977年（北宋太平興国2年）に建立された。1969年に発掘調査が行われ、塔基壇から多くの宝物が発見された。

ガラスに関しては、安によると、総計は、瓶5点、碗1点、杯1点、碗2点、瓶2点、葫蘆瓶8点、計20点が発見され、中国製ガラスとイスラーム・ガラスの両方が存在する（安 1984)。イスラーム・ガラスに関しては、一時期に納

められたのではなく、隋代から順次埋納されていったようである。貼付紐装飾小瓶のほかは、旋盤カット装飾小瓶、無装飾の円筒形ビーカー、丸底瓶、小瓶などの典型的な9～10世紀のイスラーム・ガラスであった（出光美術館 1997：nos, 46-53）。

5．日本

日本では、東大寺正倉院の白瑠璃瓶、唐招提寺の舎利容器などが有名である。また、福岡県鴻臚館遺跡から出土した2片のガラス容器は、1点が無色の円筒形ビーカー口縁部、もう1点が淡緑色の小瓶口縁部であると推定され、静志寺出土品との関連性が認められる（福岡市教育委員会 1992：48-51）。

以上、遠隔地に輸出されたイスラーム・ガラスをみると、ふたつのグループに分けることが可能である。第一は、貼付装飾、ラスター装飾、刻線カット装飾などに特徴づけられる法門寺に代表される9世紀前半を中心としたグループである。Mandaで刻線カット装飾が1片出土している他は、中国、東南アジア地域に集中している。第二は、円筒形ビーカー、円筒形首部をもつ小瓶、濃青丸底瓶、旋盤線カット装飾などに代表されるより一般的なイスラーム・ガラス群で、静志寺に代表される9世紀後半から10世紀にかけてのグループであり、分布圏は広く、出土量も多い。Manda, Kilwaの東アフリカ沿岸部、そして、静志寺、鴻臚館、唐招提寺などの東アジア地域まで、広域に見られる。

刻線カット装飾ガラスの特質と文様分析

1．刻線カット装飾技法と出土遺跡

先端の尖った硬い道具でガラス表面を刻む装飾技法は、ローマ・ガラスに見られる。しかし、区割り線を描いたり、他のカット装飾の補助的な手段に止まっていたが、イスラーム・ガラスでは、文様全体を刻線カットで表現するようになった。刻線カット装飾が施されるガラスの色調は、濃青、褐色、紫などの濃色が多く、刻られた部分の線を白く際出させる効果を持つ。刻線用の器具は現在ではダイヤモンドが使用されているが、当時は、硬い石であったと考えられる。この技法は、旋盤を用いて線彫りする技法が流行すると、ほとんど姿を消し、年代が比較的短期間に限定される。

発掘調査で刻線カット装飾ガラスが出土した遺跡には、Nishapūr（Kröger 1995：nos. 164, 165）、Sāmmarā（Lamm 1928：nos. 251-259）、Nippūr（Meyer 1996：no. 168）、Ukhaidir（Hana' 1976：nos. 42, 43）、Sūsa（Lamm 1931：Pl. 77/2、Hardy-Guilbert 1984：Fig. 32/1、Kervran 1984：Fig. 8/19）、Raqqa（Muḥammad 1971：200-203）、al-Mināʾ（Lane 1937：Fig. 12/G）、Nessana（Harden 1962：Pl. 20/20）、Fusṭāṭ（真道 1992：図版IV-6-6-21～23；Shindo 2000：236）、Rāya（真道 2000b：62）、Bādi'（Kawatoko 1993：Fig. 4/9）、Manda（Morrison 1984：Fig. 131/e）がある（図1下線）[5]。とくに、Rāyaからは、4回の発掘で計105点もの刻線カット装飾片が発見されている（表1）（真道 2000b：54）。

2．器形

1）脚付杯

Metropolitan美術館に収蔵されている脚部が段を持つ杯（図2-1）（Jenkins 1983：no. 16）は、刻線カット装飾では珍しい器形である。色調も、通常は濃い色が使用されるが、これは淡青色である。脚部をもつ杯は、6～8世紀のビザンツ・ガラスの流れを汲むと考えられるが、ビザンツの杯よりも寸法が大きくなり、脚部に段がある点で異なっている。脚付杯は、ビザンツ時代においては、キリスト教とワインに関連した器形であるが、Metropolitan美術館の刻線カット装飾ではal-Lāh（神）という文字が見られ、イスラームに帰依した者に使用されたことは間違いない。しかし、脚付杯はイスラーム時代に入ると徐々に姿を消し、

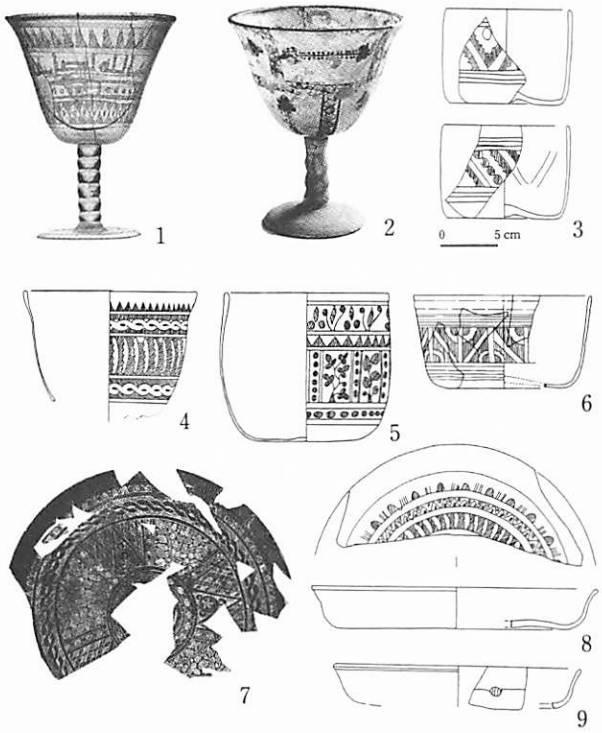


図2　刻線カット装飾ガラス？

1　Jenkins 1986：no. 16, MMA 65, 173.1
2　Raqqa出土、Abdul-Karīm 1993：no. 314, MD A. 16032
3　Raya出土、RG 5659, RG 5669
4　Raqqaの出土、Muḥammad 1971, MD A, 16043
5　Raqqaの出土、ibid. MD A, 11403
6　Fusṭāṭ出土、G-600
7　Nishapūr出土、Kröger 1995：no. 164
8　Rāya出土、RG2257
9　Rāya出土、RG329

脚のないコップ状の杯が主流となる。

Jenkinsも指摘しているように、この器形はRaqqa出土の多彩ラスター・ガラスの器形と近似している（図2-2）（Abudul-Kharīm 1993: no. 314)。さらに、Fusṭāṭの8世紀後半のピットからも同器形の製品が出土していることから、Jenkinsは、この杯の年代が8世紀後半まで遡る可能性を示唆し、8～9世紀に年代を設定している（Jenkins 1986: 18)。

2）碗、ビーカー

Raqqa出土の刻線カット装飾ガラスの中1点は、口縁が外反する碗の形状をしている（図2-4）（Muḥammad 1971: 202-203)。これは、Fusṭāṭから出土したas-Ṣamadの名のある772年製作のラスター彩ガラスと共通する（Pinder-Wilson 1973: 28)。

胴部が垂直に立ち上がる円筒形ビーカー（図2-3、5、6）に関しては、刻線カット装飾の中で最も頻度が高く、Rāyaの出土品を見ても、105点中93点と90%近くを占めている(表1)。これは、9～11世紀にかけて、非常に多数製作・使用された器形で、刻線カット装飾のほか、無装飾は勿論のこと、ラスター彩、ピンサー、旋盤線カットなどのこの時代に流行していた装飾ガラスの多くがこの器形にみられる。

器形に関しては、胴部にやや丸みがあり、底部からの立ち上がりが緩やかな弧を描いている器形と胴部が底部から直角に立ち上がる器形に大別でき、年代的には前者が古い[6]。後者は高さも様々で、出土数が多い。しかし、刻線カット装飾が施される器形としては前者が多く、例としてRaqqaの出土品があげられる（図2-5）（Muḥammad 1971: 200-201)。後者の例は少ないが、David Collectionの例がある（von Folsach 1990: no. 212)。両者を比べると、Raqqaの方が、装飾が緻密で丁寧であり、David Collectionの方が粗い。これは、年代とともに技術が衰退していく過程を示していよう。

表1　Raya出土の刻線カット装飾片

	ビーカー	大皿	碗	瓶	合計
濃青	59	6	1	0	66
濃褐	1	0	0	0	1
褐	7	3	0	0	10
濃紫	1	0	0	0	1
紫	2	0	0	1	3
淡紫	14	1	0	0	15
淡青	3	0	0	0	3
淡青緑	1	0	0	0	1
淡緑	3	0	0	0	3
無色	2	0	0	0	2
合計	93	10	1	1	105

3）盤

盤は、イスラーム・ガラスの器形の中では一般的ではなく、むしろ、ローマ・ガラスからイスラーム・ガラスに移行する過程で失われ、施釉陶器に譲られた器形である（真道1987)。しかし、刻線カット装飾との関連では、点数は多くないが出土例がある。

形状は、法門寺に見られる側面がやや外開きで平底の器形が主である(図3-1～6)。これらは、宙吹き技法によって製作されている。法門寺の例を見ると、底部に大きなポンテ痕が見られることから、丸く膨らませた吹き玉をポンテ棹に写して吹き棹から切り離し、その開口部を大型のピンセットのような道具を用いて押し開き成形したのであろう。成形後、図3-6以外は、ピンセットで挟んで口端を少し外側に開き、再加熱することで口端部を熱による表面張力を利用して丸く整え、切り離した後のぎざぎざを取っている。最後に、ポンテ棹を取り外し終了であるがポンテ棹のあたっていた部分が押されて、底部中央が盛り上がっている。器形がわかるRāya出土の大型片(図2-8、9)は、側面がやや外半しながら立ち上がり、ポンテによって中央部がやや盛り上がった平底をもち、法門寺の器形に近い。ただ、色調が褐色で、刻線が粗い点では相違している。この他にも刻線カット装飾を伴う同類の器形に復元されると

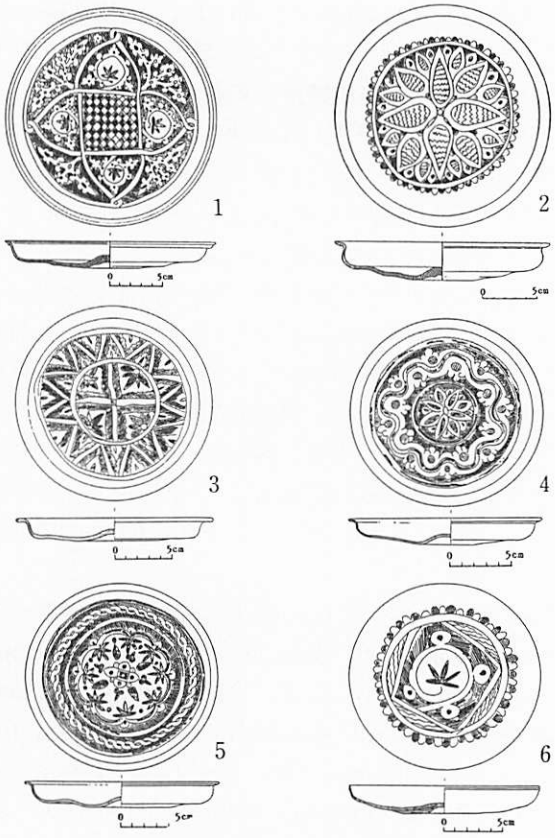


図3　法門寺出土刻線カット装飾ガラス
(An 1991: Figs. 3-8)

考えられる破片は、Rāya, Sāmarrā (Lamm 1928: no. 251)、Fusṭāṭ[7] などで発見されているが、刻線カット装飾以外の同器形の例はまれである。この器形の色調は濃青が主で、Rāya でも10点中6点が濃青である。

これに対し、Nishapūr の盤は、高台の痕跡があったとされ（図2-7）(Kröger 1995: 117, nos. 164, 165)、法門寺や Raya の盤とは様式的に異なっている。

3．法門寺出土刻線カット装飾盤

刻線カット装飾は、中国の法門寺仏塔塔基から発見された6点の青色の盤に見られる（図3-1～6）。中近東各地の遺跡から出土する遺物のほとんどが破損しているのに対し、丁重に納められていたため完形であることに加え、製品自体の水準が高く、文様の複雑さ及び達成度も比類なく、イスラーム・ガラスの中でも最上の部類に属する。6点すべてが地下宮後室の西南隅に置かれた木箱から出土しており、皇室の恩賜品として衣物帳に記されている（新潟県立博物館 1999：169)。盤の寸法は、高さが2.5cm 前後、直径が15～21cm の間で、ほぼ均一である。文様パターンを見ていくと、基本構成と文様要素に共通のパターンが存在することがわかる。

図3-1 (An 1991：Fig. 3) は、平帯で、正方形の各辺に頂点がねじれたアーチを加えた図形が基本構成となり(3 a：後述する装飾要素の分類番号。以下同様)、その内外をいくつかのパターンで埋めている。正方形の内部は、小さな菱形内を交互に斜線で埋めた市松格子となっている（4 a)。アーチの内部は、楓の葉のような五葉を中心に唐草状に巻いた線(1 e)と、その周囲に平帯による唐草がめぐらされている(2 b)。アーチの外の部分は、その交点から平帯の唐草が木が立ち上がるように伸びている（2 a)。

図3-2 (An 1991：Fig. 4) は、滴状の花弁が4枚開き、その間を順次、中、小の滴状花弁があり(5 a)、滴状花弁の内部は波線で埋めている。その周囲には環状平帯を配し（3 b)、さらに半円状の小アーチを並べ、その内部を交互に斜線を引いている（4 l)。

図3-3 (An 1991：Fig. 5) は、まず、平帯で二重円を描き(3 b)、その内部を幾何的に分割している。中央の円内部は、平帯で十字を切り(3 d)、4分割された中に花文を配し、その周囲を枠取りするように白く残して、それ以外を斜線で埋めている(2 h)。外周部分は、平帯の斜線で三角形を交互に配し、その中に平帯唐草の花部分を互い違いに置いている（2 j)。

図3-4 (An 1991：Fig. 6) は、中央の円内に図3-2と同パターンがあり(5 a)、その周囲に二重の平帯唐草をめぐらせ(2 c)、文様の主要部分以外を斜線で埋めている。さらに、この盤は、刻線を施した上から金を塗りこんだ痕跡が見とめられ、現在はオレンジ色に変色している。

図3-5 (An 1991：Fig. 7) は、中央部分に図2-1に似た幾何文(5 b)があり、そのまわりに2タイプの葉文が交互に並び(1 h, 1 i)、さらにその周囲に8つの五葉文(1 e)を繋いだ唐草がある。その外周に環状平帯(3 b)、捻れ縄目文(2 f)がある。唐草と各帯の空隙は斜線で埋め尽くされている。この盤も図3-4と同様に金が塗り込められていた痕跡がある。

図3-6 (An 1991：Fig. 8) は、図3-1のアーチ内部の五葉唐草を中央に配し(1 e)、その周囲を小円のついた平帯唐草（2 g)、平帯菱形（3 c)、環状平（3 d）で囲み、図3-2と同様の半円の連続文（4 l）が最外周にある。そして、文様の空隙を斜線と波線で埋めている。

この6点の装飾パターンに最も近いのは、Nishapūr 出土の盤であり、五葉唐草（1 e)、捻れ縄目文（2 f)、半円連続文（4 l）など、装飾要素にも共通項目が多い（図2-7)。しかし、Nishapūr の例に見られるような繊細な植物文は法門寺には見られず、この手の植物文が Raqqa 出土品に存在するなど、異なる点も存在する。そこで、刻線カット装飾において多様される器形、装飾要素を整理して分類、比較する必要がある。

4．文様分類と分析

刻線カット装飾技法の装飾効果の特徴は、刻線部分とそれ以外のガラス素地の色調とのコントラストにある。さらに、文様の描き方が、刻線1本で文様を描く、2本の刻線で挟んだり囲んで作った平帯や面で文様を描く、刻線で作られた面を斜線で埋める、などの手法が取られている。

刻線カット装飾の文様は、これまでに多彩ラスター彩陶器と文様を構成する市松格子や唐草文など細部のパターンに共通部分があると指摘されてきた (Kröger 1995: 118)。しかし、ラスター彩陶器にとどまらず、様々な種類のガラスや陶器、象牙製品など、イスラーム時代初期の製品と密接な関連が認められ、その分析は、製作地および年代の指針になる。

これらの装飾要素を整理したものが図4であり、これらの組み合わせを、発掘調査による主要出土品と博物館収蔵の完形品を対象に整理したのが表2である。

1）単線植物文

- 1 a　細密な葉のある木もしくは蔦の組み合わせ
- 1 b　数本の三葉の枝をもつ木もしくは蔦
- 1 c　数本のアーモンド状の葉の枝をもつ木もしくは蔦
- 1 d　数本の丸葉の枝をもつ木もしくは蔦
- 1 e　楓状の五葉を伴う唐草
- 1 f　三葉の枝1本
- 1 g　数本の丸葉の枝とアーモンド状の葉など単純化された葉の繰り返し

図4　装飾要素

1h　三葉のみ

1i　アーモンド状の葉のみ

単線による植物文の中で、複雑で写実的に表現された1a～1d、五葉の1eは、法門寺、Nishapūr, Raqqaの出土品に見られる。この文様の原型は東地中海地域に広く広まっていたローマ・ビザンツ時代の葡萄と蔦の意匠にもとめられ、8世紀においても、ビザンツの直接的影響を受けた蔦唐草が、Damascusの大モスク柱廊部の壁面（ヤマンラール1999：no. 2d)、JerusalemのAqsaモスクの木製パネル（図5-5）(Grabar 1973: Fig. 53) やシリア、エジプトで製作された象牙製品（von Folsach 1990: no. 280ほか)、ラスター彩ガラス（Lamm 1941: Pl. 9）などに描かれている。

1eの五葉に関しても、この蔦唐草が徐々に簡略化、抽象化、図案化されていく過程の中で生まれたと考えられる。図5-4にみられる象牙製容器は、壺から立ち上がる植物文の図案にのっとって、葉の部分が1eであるという、文様の流れを端的に示している (Jenkins 1983: 32)。この他、1eはその後も各種工芸品に見られ、とくにAshmolean美術館所蔵の9世紀イラクの白地藍彩碗(図5-5）(Allan 1991: no. 1) は、上から見ると、法門寺出土品（図3-5）に見られる簡略化された五葉文が円弧によって連結されている様式と合致する[8]。

2）平帯による植物および唐草文

2a　平帯による木もしくは蔦

2b　2aを唐草状にしたもの

2c　平帯唐草

2d　平帯唐草簡略形

2e　瘤付捻れ縄目

2f　捻れ縄目

2g　環状平帯と小円組み合わせ

2h　花弁が斜線である花文

2i　花弁が白抜きである花文

2j　簡略化・図案化された花文

2k　ギザギザのある花弁の連続文

2l　平帯状花弁の連続文

2類は、刻線によって囲まれた白抜き部分を浮き上がらせる手法によって、植物文や捻れ縄目文、花弁文などを表現している。複雑なものでは2aのような植物文も平帯で描かれ、これが唐草状になったものが2bであり、2c、2dと簡略化されていく。2a～2cまでは法門寺出土品にみられ、2bがDüsseolorfの瓶に見られるが（Kröger 1998: 3-5)、他に例は少ない。粗雑に簡略化された2eはNishapūrとFusṭāṭに見られる。

捻れ縄目は、金属器や陶器などにも一般的に使用されているが、その使用年代は9世紀より下るものが多い。刻線カット装飾ガラスで見られる捻れ縄目には縄目の交点に瘤がある2eとない2fの2通りがある。2eは、法門寺、Nishapūr、Raqqa、2fは、Raqqa、Düsseldorf収蔵品に見られる。Raqqaの出土品には2eと2fの両方が見られる。

2h、2i、2jは、花文の一部であったり、簡略化されたもので、2hは法門寺のみ、2iは法門寺とBerlin美術館のビーカー（Kröger 1984: no. 146)、2jはFusṭāṭとR-ayaの出土品に見られる。これらは、単独ではなく、区切りのための平帯などと組み合わされて使用される。類品としては、花文と平帯の繰り返し文がNessanaの彩色ガラスに見られる（Harden 1962: Pl. 20/18, 19)[9]。

2kと2lは、花弁を連ねたもので、2kの花弁が波うっており、2lは平坦である。両者とも法門寺出土品には見られず、Sūsa、Raqqa、Fusṭāṭの出土品、Düsseldorf収蔵品に見られる[10]。

3）平帯による図形

3a　正方形とアーチの組み合わせ

3b　環

3c　四角

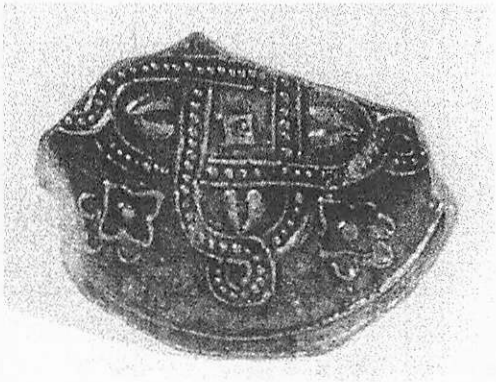
3d　十字

表 2　刻線カット装飾分類一覧

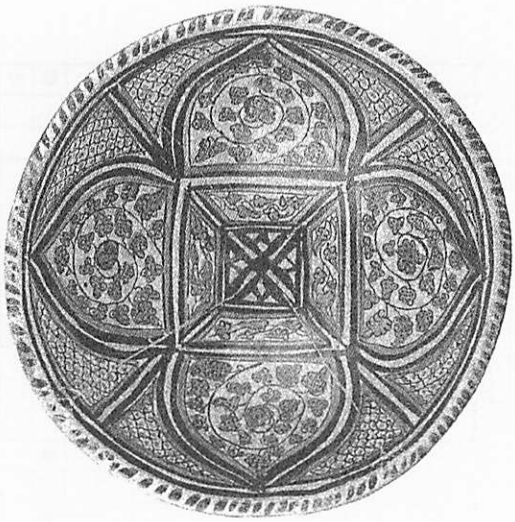
資料＼装飾要素	1a	1b	1c	1d	1e	1f	1g	1h	1i	2a	2b	2c	2d	2e	2f	2g	2h	2i	2j	2k	2l	3a	3b	3c	3d	3e	3f	3g	4a	4b	4c	4d	4e	4f	4g	4h	4i	4k	4j	4k	4l	4m	5a	5b	6
法門寺 1					●					●	●											●							●																	
法門寺 2																							●																●		●		●		
法門寺 3																	●	●					●		●																				
法門寺 4												●											●																				●		
法門寺 5					●			●	●					●									●																					●	
法門寺 6					●											●							●	●															●		●				
Nishapur no.164	●				●									●									●			●	●		◎							●		●		●					
Nishapur no.165													●	●									●									●													
Samarra no.251																							●						◎				●												
Samarra no.251																								●				●															◎		
Samarra no.251																													○				●												
Nippur no.168																																													
Ukhaidir no.42						●									●													●			●		●												●
Ukhaidir no.43																										●	●										●								●
Susa no.5749.1									●																						●														
Susa no.1237																					●						●	●																●	
Raqqa A.16043														●	●					●								●					●												
Raqqa A.11403		●	●				●	●																			●	●					●												
al-Mina fig.12G																																										●			
Nessana Pl.20-20																												●					●	●											
Fustat G600																			●																										
Fustat G74																											●		●				●												
Fustat G75																					●		●										●												
Fustat 倉庫													●										●										●												
Raya RG2257																				●			●										●									●			
Raya 小片総数																			7*	1													28			13		3			4				5
Badi' fig.4-9																								●					●																
Manda fig.131e																																		●											
Metropolitan																												●		●			●		●										●
Dusseldorf											●				●						●							●					●												
Berlin																		●						●			●	●										●		●		●	●		
David Collection																											●																		●
Ray Collection																											●	●				◎													

○◎ヴァリエーションがあるものは○と◎で区別した

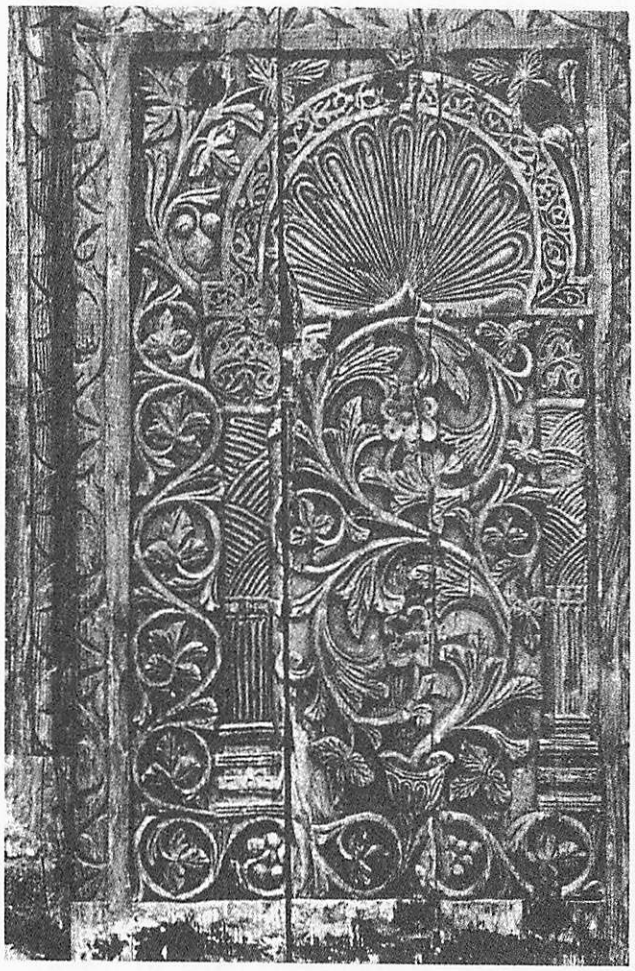
*　その他のヴァリエーションあり



1　(Philon 1980 : Fig. 26)



2　(Fehervari 1981 : no. 79)



3　(Grabar 1973 : Fig. 53)

4　(Jenkins 983 : 32)

5　(Allan 1991 : no. 1)

図5　植物文様

3 e　区切りのための三角
3 f　区切りのための縦線
3 g　区切りのための横線

2本の単線によって作られる平帯3 bから3 gは、文様のセクション区切りに補助的に使われている[11]。四角と先端が捻れたアーチを持つ平帯による組み紐の図形3 aは独特である。正方形の各辺に頂点がねじれたアーチを加えた図形は、Philonによって900年頃とされるBenaki美術館に所蔵されている初期アッバース押型陶器（図5-1）（Philon 1980: Fig. 26）に見られ、9世紀前半のQahirawānの大モスクのラスター彩タイル（ヤマンラール1999：3 b）や、Khallīlコレクション所蔵の初期多彩ラスター彩陶器は、基本構成、装飾要素に至るまで法門寺の例と極めて類似している（図5-2）（Fefervari　1981: no. 79）[12]。

4）連続文

4 a　市松格子
4 b　菱形内に小円
4 c　三角内に小円
4 d　三角と粗短斜線
4 e　三角
4 f　斜線のみによるブロック
4 g　斜線で埋められた区切り線と小円組み合わせ
4 h　内部が斜線の小円
4 i　内部が斜線と白抜きの小円組み合わせ
4 j　内部が斜線の二重小円
4 k　内部が斜線と白抜きの単線組み紐
4 l　内部が斜線と白抜きの半円組み合わせ
4 m　内部が斜線の半円＋4 f

文様の細部を埋めるように使用されている多くの三角形、小円などの連続幾何文には、様々なヴァリエーションと組み合わせがある。これらは、多彩ラスター彩陶器との関連が指摘されてきたが、4 a、4 g、4 hなどがラスター彩ガラスや石製容器など、4 bがピンサー装飾ガラスにも頻繁に用いられている。

5）様々な花文

5 a　滴状花弁組み合わせ花文
5 b　正方形とアーチに組み合わされた花文

花をイメージするような様々な要素の組み合わせで花文が表現されている。花文は、全体の文様の中心要素である場合もあれば、他のパターンと同様の一構成要素の場合もある。また、表現方法も多様である。

6）文字文

容器表面にアラビア文字が描かれることは、イスラーム工芸の特徴のひとつであるが、その初期の例が、ラスター彩、刻線カット、ピンサー装飾などのガラス器に見られる。刻線カット装飾では、文字の内部を斜線で埋める手法がとられ、Ukhaidir、Rāyaで出土しているほか、Metropolitan美術館の脚付杯、David Collectionなどにある。Metropolitan美術館の例は、形状から8～9世紀という年代が与えられており、刻線カット装飾の中でも初期に属すが、David Collectionの例は、刻線が粗雑であり、器形も9～10世紀に典型的な円筒形ビーカーである（von Folsach 1990: no. 212）。Rāyaの出土品にも、盤の中央に文字文および文字が崩れたような文様を見ることができるが、字体が異なっている。

書かれている内容は単語や短文にすぎないものが多いが、Metropolitanの例にはal-Lāhという表現が見られ、イスラームとの関連を示すともに、書かれる文字の内容からラスター彩ガラスとの関連も指摘できる。

5．年代と製造地

刻線カット装飾の年代は8世紀の存在を示すNippūrおよびRaqqaの出土状況[13]、8世紀後半の可能性が指摘されているMetropolitan美術館の脚付杯の器形、さらに、8世紀後半のラスター彩ガラスとの器形の共通性、文様の類似性からも、刻線カット装飾ガラスの登場は8世紀後半と考えられる[14]。その後、9世紀を中心とする多くの遺跡から発見されており、この時代に刻線カット装飾が広まり、浸透したことがわかる。年代の下限に関しては、他のカット装飾に補助的に使用されることを除けば、静志寺や11世紀初めのSerçe　Liman沖の沈没船から発見されていないこと（Bass 1984）から、10世紀中には姿を消していたと考えられる。

製造地に関しては、精製品と粗製品の差を考慮する必要がある。精製品はRaqqa、Nishapūr、法門寺という強力な政治権力と結びついた都市で発見される一方、中近東の諸都市、および、紅海沿岸のRāya、Bādi‘、東アフリカ沿岸のMandaで発見された製品の多くは、カットが粗い粗製品である。粗製品の場合は地方の工房でも製作されたと考えられるが、精製品に関しては熟練した職人のいる限定された工房、おそらくは、一定の中心都市で製作されたと推定される。年代に関しても、精製品が8世紀末から9世紀前半、粗製品が9～10世紀である。すなわち、刻線カット装飾が登場して間もなくの質の高い精製品は中枢権力者もしくは遠隔地の権力者に献上品の形で貢がれ、それに遅れて大量に製作されるようになってから生活の中での実用に供することが目的で粗製品が製造、流通したと考えられる。

刻線カット装飾と海上交易

法門寺出土の刻線カット装飾盤の製造地に関しては、これまで、エジプト（由水 1992：256）、イランもしくはイラク（An 1991: 123-124; Kröger 1995: 117）、あるいは、漢

然と西アジアやイスラム（東京国立博物館 1998：104；新潟県立博物館 1999：183）などのように、中近東各地の可能性が指摘されてきた。法門寺出土品以外に知られていた刻線カット装飾盤の類例が唯一 Nishapūr のみであり、文様様式も類似していることから、安や Kröger は法門寺の製品と Nishapūr の製品が同時代の同一工房で製作され、Nishapūr から中国へ積み荷されたと考えている。しかし、1998～2000年までのシナイ半島 Rāya の発掘調査では、新たに同タイプの刻線カット装飾盤が複数発見され、新資料が加えられたことによって、再考の余地が生じた。

Kröger は、1995年の Nishapūr のカタログの中で、「刻線カット装飾は多くの遺跡から発見されており、製造地について絞る必要はない。むしろ、地方で製作されたと考えるべきで、Nishapūr で容器が作られ刻線装飾された理由もない」、と述べている。そして、「ラスター彩碗がイラク製と考えられるので、刻線カット装飾盤も同様であるとの可能性も否定できない」、と続けている(Kröger 1995：117)。次いで、法門寺出土品に関する1999年の論文の中では、貼付装飾瓶がシリア製、ラスター彩碗がイラク製、刻線カット装飾盤が Nishapūr の可能性が高いと述べている（Kröger 1999：432-434)。しかし、膨大な Nishapūr 出土ガラスの中で刻線カット装飾ガラスはわずか2点に過ぎない。さらに、本論で行った文様様式の分析、および、品質の高さを考慮すれば、北東シリアからイラク方面で製作された製品が西のイスラームの中心地 Nishapūr にもたらされたものと想定される。

次に、法門寺出土の刻線カット装飾ガラスが通じて中国にもたらされた経路であるが、安は、Nishapūr 経由の陸上ルートの可能性を指摘しており（An 1996：134)、Kröger は、両方の可能性を論じている（Kröger 1999：484-487)。Nishapūr 以東の内陸で刻線カット装飾およびラスター彩ガラスの出土報告例がないのに対し、ラスター彩や貼付装飾など法門寺の他の収蔵品と合致する遺物が Ko Kho Khao、Cūlao Cham などの東南アジア沿岸部の港湾遺跡で発見されている(真道 2000a)。さらに、現在のところ、東南アジアでの出土例は確認していないが[15]、刻線カット装飾ガラスが海上交易ルート上で運搬されていたことは、Rāya、Bādi‘、Manda の出土品から明らかである。以上のことから、法門寺出土の刻線カット装飾ガラスも、貼付装飾瓶やラスター彩碗と同じ海上ルートで流入したと考えられる。

さらに、法門寺出土品と静志寺出土品を比較してみると、法門寺出土品はシリア、イラクで製作された9世紀前半を中心としたイスラーム・ガラスの中でも最上品とも言えるグループで、静志寺出土品は、イランと関連が深い9世紀後半から10世紀のグループと考えられる。後者は、品質もイスラーム・ガラスの中でも一般的で、流通範囲もさらに広く、東アフリカ沿岸部から日本にまで及んでいる。9世紀前半では珍奇な高級品としてイスラーム・ガラスの最上品を限定して取り扱っていたのが、徐々に、大量かつより広範囲に実用目的で輸出するようになったことを示している。この背景にガラスの発展史が関連していることは明らかであるが、海上交易の場合商品の担い手の中心が Sīrāf 系商人であることを考慮すると、当初北東シリアやイラク方面の高級ガラスを扱っていたのが、次第に近隣地域でガラス製造が発達し、そこで製作されたガラスを入手するようになった可能性があげられる。

今回は、9～10世紀における中国の大寺院からの出土品を主な対象としたが、1178年には200点以上ものガラス器が三仏斉国から海路献上された記録があるように[16]、実際には、時代とともに、ガラス器はもっと多量に流通していったと考えられる。今後も、陶磁器が東から西へ運ばれたのに対し、西から東に運ばれたガラス器の海上交易上の重要性を明らかとしていきたい。

註

1）7-13世紀の遺物が確認されている。

2）ここは、9世紀のアラブ商人によって書かれた『インド＝シナ物語』にでてくる良質の水が涌き出るサンフ・フーラートと考えられている。

3）安は、茶托は中国製、何点かは確定できず、それ以外はイスラーム・ガラスであると述べている（安 1990)。

4）Kröger は、8世紀から9世紀はじめに中近東地域から輸出されたと指摘している（Kröger 1999：482)。

5）この他に報告書に掲載されていないが、Sīrāf、Aqaba から出土していることを Meyer が言及している（Meyer 1996：249)。

6）Raqqa 出土品の年代、同形のラスター彩ガラスの存在（Abudul-Kharīm 1993：no. 313）や、旋盤カット装飾などが見られる器形との比較による。

7）現在筆者が整理中の、エジプト考古最高会議所蔵のフスタート出土品の中に含まれる。詳細については、後日、報告を行う。

8）Sīrāf の出土品や建材などにも五葉文が描かれているが、形態的に崩れており、クーファ書体のアラビア文字と組み合わされており、影響は受けているが異質な文様と判断される（Whitehouse 1969：Pl. 8)。また、後の時代になって五葉文がイランの製品に盛んに見られるようになるが、9世紀の刻線カットガラスと直接関連する者ではない。むしろ、これは、ペルシャの伝統ではなく、地中海の文化の影響を受け、形を変えて広まっていった結果と考えられる。

9）Harden によると、この彩色は、黒い線で輪郭を描いて内部を赤、緑、黄で塗ったもので、グレコ＝ローマよりコプトの文様に類似しており、年代は5～7世紀としている（Harden 1962: 80)。

10）このほかにも、小片ではあるが、Benaki 美術館などにある(Clairmont 1978：no. 257)。

11）押型陶器も多彩ラスター陶器もともに、ペルシャ陶器の技術伝統を引くものでなく、エジプト、シリアで製作されていたラスター彩ガラスや東地中海地域に広まっていたローマ陶器の伝統の上に成立したものである。また、平帯によって、区割りを行ったり、

図形を描いたりする文様は、エジプトのFusṭāṭで製作されていた飲料水用小壺の首部に付けられていたフィルター部分の文様にも多用されている（櫻井・川床 1992：図版IV-2）。

12) このほかにもラスター彩陶器に同パターンの例が存在する。また、押型陶器も多彩ラスター陶器もともに、ペルシャ陶器の技術伝統を引くものでなく、エジプト、シリアで製作されていたラスター彩ガラスや東地中海地域に広まっていたローマ陶器の伝統の上に成立したものである。また、平帯によって、区割りを行ったり、図形を描いたりする文様は、エジプトのFusṭāṭで製作されていた飲料水用小壺の首部に付けられていたフィルター部分の文様にも多用されている（櫻井・川床 1992：図版IV-2）。

13) RaqqaのPalace Bが機能していたのは796年～808年であるが、出土品の完成度の高さから判断して、すでに、8世紀後半には刻線カット装飾ガラスが存在していたと考えられる。

14) ラスター彩ガラスと刻線カット装飾ガラスとの関連については、これまでにも両者の文様や器形の類似性は指摘されてきた（Kröger 1995：118, Jenkins 1986：18）。8世紀末から9世紀初頭の短期間アッバース朝カリフの居城がおかれたRaqqaの宮殿Bから発見された2点の多彩ラスター彩ガラスの器形は、ともに、刻線カット装飾のものと共通である（Jenkins 1983：18）。ラスター彩技法は陶器よりもガラス器における使用が先行しており、8世紀後半に製作されていた事実が確認できる。現在知られているラスター彩ガラスの最古の例は、770年代にFusṭāṭで製作された2点の単色ラスターである。しかし、初期ラスター彩ガラスについては、単色ラスター以外にも、多色ラスターや不透明なオレンジ色で塗るラスターなどの種類があるが、これまで、資料数の問題で十分に分類、研究されていない。この点に関しては、Raya遺跡で多数の出土例があり、今後、この点に関して明確にしていく予定である。

15) 現在のところ東南アジアからの出土例を確認していないが、未発表資料の精査や今後の発掘によって出土例が確認される可能性は高い。

16) 『宋会要輯稿』第199冊蕃居夷七之四八

参考文献

Abudul-Karim Rafeq 1993 Damaset Alep, Metropoles commerciales des Ayyubides aux Ottomans. *Syrie Memoire et Civilisation*, 396-481, Paris, Institut du monde arabe. Allan, J. 1991 *Islamic Ceramics*. Oxford, Ashmolean Museum.

An Jiayao 1991 Dated Islamic Glass in China. *Bulletin of the Asia Institute*, New Series 5: 123-137.

An Jiayao 1996 Ancient Glass Trade in Southeast Asia. In The Office of the National Culture Commission 1996, 127-138.

Bass, G.F. 1984 The Nature of the Serçe Liman Glass. *Journal of Glass Studies* 26: 64-69.

Bronson, B. 1996 Chinese and Middle Eastern Trade in Southern Thailand During the 9th Century A.D. In The Office of the National Culture Commission 1996, 181-200.

Chittick, N. 1974 Chap. 24. The Glass. In *Kilwa -An Islamic Trading City on the East African Coast, Vol.II The Finds*, 395-411. Nairobi, The British Institute in Eastern Africa Memoir.

Clairmont, C. 1977 *Catalogue of Ancient and Islamic Glass.* Athens, Benaki Museum.

Engle, A. 1982 More examples of Scratched and Incised Glass. *Readings Glass History* 13-14 (Glass and Religious Man): 27-34.

Fehervari, G. and Safadi, Y. H. 1981 4. Glass. In Khalili Collection (ed.), *1400 Years of Islamic Art : A Descriptive Catalogue*, 204-219. London, Khalili Collection.

von Folsach, K. 1990 *Islamic Art. The David Collection*. Copenhagen, Davids Samling.

Foy, D. 1999 Lampes de verre fatimides a Fostat : le mobilier des fouilles de Istabl 'Antar. In M. Barraucand (ed.), *L'Egypte fatimide son art et son histoire*, 179-196. Sorbonne, l'Universite de Paris.

Grabar, O. 1973 *The Formation of Islamic Art*. London, Yale University Press.

Hana' Abdul Khalīq 1976 *The Islamic Glass in the Iraqi Museums and Stores*. Baghdad Ministry of Information Directorate General of Antiquities.

Harden, D.B. 1962 Glass. In D. Colt (ed.), *Excavations at Nessana (Auja Hafir, Palestine)*, 76-99, Pl.20. London, British School of Archaeology in Jerusalem.

Hardy-Guilbert, C. 1984 Les Niveaux Islamiques du Secteur Apadana -ville Royale. *Cahiers de la D. A. F. I.* 14: 121-209.

Henderson, J. 1996 Glass production in Raqqa, Syria. *Annales du 13e Congrès de A. I. H. V.*: 257-268. Lochem, l'association internationale pour l'histoire du verre.

Jenkins, M. 1983 *Islamic Art in the Kuwait National Museum. The al-Sabah Collectoion*. Sotheby Publicarions.

Jenkins, M. 1986 *Islamic Glass. A Brief History*. New York, Metropolitan Museum of Art.

Kawatoko, M. 1993 Preliminary Survey of 'Aidhāb and Bādi' Sites. *Kush* 16: 203-224.

Kervran, M. 1984 Les nineaux Islamique du Sectueur oriental du tepe de l'Apadana. *Cahiers de la D. A. F. I.* 14: 211-235.

Kröger, J. 1984 *Glas, Islamiche Kunst Loseblattkatalog Unpublizierter Werke aus Deutschen Museen*, Band 1. Rhein, Philipp von Zabern.

Kröger, J. 1995 *Nishapur : The Early Islamic Glass*. New York, The Metropolotan Museum of Art.

Kröger, J. 1998 Painting on glass before the Mamluk period. In R. Ward (ed.), *Gilded and Enamelled Glass from the Middle East*, 8-11. London, British Museum Press.

Kröger, J. 1998 Gläser aus spätantiker und islamischer Zeit in der Abegg-Stiftung. *Entlang der Seidenstrasse Fruhmittelalterliche Kunst zwischen Persien und China in der Abegg Stiffung, Riggisberger Berichte*, 6, 299-380. Ribbisberg, Abegg-stiftung.

Kröger, J. 1999 Laden with Glass Goods from Syria via Iraq and Iran to the Famen Temple China. *Coins, Arts, and Chronology Essays on the pre-Islamic History of the Indo-Iranian Bordelands, Österreichische Akademie der Wissenschaften Philosophisch -Historische Klass Denkschriften*, Band 280, 481-498. Wien, Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Lamb, A. 1965 A Note on Glass Fragments from Pengkalan Bujang. *Journal of Glass Studies* 7: 35-40.

Lamb, A. 1966 Old Middle Eastern Glass in the Malay Peninsula. *Artibus Asiae* 23: 74-88.

Lamm, C. J. 1928 *Das Glas von Samarra*. Berlin, Dietrich Reimer.

Lamm, C. J. 1929 *Mittelalterliche Gläser und Steinschnittarbeiten aus dem Nahen Osten*. Berlin, Dietrich Reimer.

Lamm, C. J. 1931 Les Verres Trouves á Susa. *Syria* 12: 358-367.

Lamm, C. J. 1941 *Oriental Glass of Medieval Date Found in Sweden and the Early History of Luster-Painting*. Stockholm, Wahlstrom & Widstrand.

Lane, A. 1937 Medieval Finds at al-Mina in North Syria. *Archaeologia* 87 : 19-78.

Meyer, C. 1996 Sasanian and Islamic glass from Nippur, Iraq. In *Annales du 13e Congrès de A. I. H. V.*, 247-255. Lochem, L' association internationale pour l'histoire du verre.

Moore, O. 1998 Islamic glass at Buddhist sites in medieval China. In R. Ward (ed.), *Gilded and Enamelled Glass from the Middle East*, 78-84. London, British Museum Press.

Morrison, H. 1984 Chap. 9 The Glass. In N. Chittick (ed.), *Manda -Excavations at an Island Port on the Kenya Coast*, 299-304. Nairobi, The British Institute in Eastern Africa.

Muḥammad Abu-l-Faraj al 'Ush 1971 Incised Islamic Glass. *Archaeology* 24 : 200-203.

Nassib Saliby 1954-1955 Rapport Préminaire sur la deuxième campagne de fouilles a Raqqa (automne 1952). *Annales Archéologiques de Syriennes* 4-5 : 205-212.

Northedge, A. and Falkner, R. 1987 The 1986 Survey Season at Samarra. *Iraq* 49 : 143-174.

Philon, H. 1980 *Early Islamic Ceramics*. Athens, Benaki Museum.

Pinder-Wilson, R. H. and Scanlon, G. T. 1973 Glass Finds from Fustat : 1964-1971. *Journal of Glass Studies* 15 : 12-30.

Pinder-Wilson, R. H. and Scanlon, G. T. 1987 Glass Finds from Fustat : 1972-80. *Journal of Glass Studies* 29 : 60-71.

von Saldern, A. 1996 Early Islamic glass in the Near East problem of chronology and provenances. In *Annales du 13e Congrès de A. I. H. V.*, 225-246. Lochem, L'association internationale pour l' histoire du verre.

Shindo, Y. 2000 The early Islamic glass from al-Fusṭāṭ, Egypt. In *Annales du 14e Congrès de A. I. H. V.*, 233-237. Lochem, L' association internationale pour l'histoire du verre.

Srisuchat, A. 1996 Merchants, Merchandise, Markets : Archaeological Evidence. In Thailand Concerning Maritaime Trade Interaction Between Thailand and Other Countries Before the 16th Century A. D. In The Office of the National Culture Commission 1996, 237-274.

The Office of the National Culture Commission (ed.) 1996 *Ancient Trade and Cultural Contacts in Southeast India*. Bangkok, The Office of the National Culture Commission.

Whitehouse, D. 1968 Excavations at Sīrāf : First Interim Report. *Iran* 6 : 1-22.

Whitehouse, D. 1969 Excavations at Sīrāf Second Interim Report. *Iran* 7 : 39-68.

Whitehouse, D. 1970 Excavations at Sīrāf Third Interim Report. *Iran* 8 : 1-30.

Whitehouse, D. 1971 Excavations at Sīrāf Fourth Interim Report. *Iran* 9 : 1-27.

Whitehouse, D. 1972 Excavations at Sīrāf Fifth Interim Report. *Iran* 10 : 63-99.

Whitehouse, D. 1973 Excavations at Sīrāf Sixth Interim Report. *Iran* 11 : 1-30.

安　家瑤　1984　「中国早期玻璃器皿」『考古学報』4期　413-447頁。

安　家瑤　1990　「試探中国近年出土的伊斯蘭玻璃器」『考古』12期　1116-1126頁。

出光美術館　1997　『地下宮殿の遺宝　中国河北省定州北宋塔基出土文物展』。

川床睦夫　1999　「イスラーム時代エジプトの考古学的調査」『中近東文化センター開館20周年　中近東文化センターの海外発掘調査』34-63頁。

川床睦夫　2000　「港を掘る―シナイ半島の港市遺跡」尾本恵市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一編『海のアジア2　モンスーン文化圏』99-122頁　岩波書店。

櫻井清彦・川床睦夫編　1992　『エジプト・イスラーム都市アル＝フスタート遺跡発掘調査1978～1985年』早稲田大学出版部。

真道洋子　1987　「カラニス出土のガラス器」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』6巻　75-99頁。

真道洋子　1992　「ガラス器」櫻井清彦・川床睦夫編『エジプト・イスラーム都市アル＝フスタート遺跡発掘調査1978～1985年』第1分冊　304-555頁、第2分冊　572-617頁　早稲田大学出版部。

真道洋子　1994　「エジプトにおけるイスラーム・ガラスの展開」『民族藝術』10号　62-69頁。

真道洋子　1998a　「初期イスラーム時代の濃青丸底瓶　9～10世紀のイスラーム・ガラスの技術と製品の伝播をめぐる考察」『ＧＬＡＳＳ』42号　2-15頁。

真道洋子　1998b　「ガラス器」小川裕充・弓場紀知責任編集『世界美術大全集東洋編5五代・北宋・遼・西夏』257-260頁、402-404頁　小学館。

真道洋子　2000a　「9～10世紀におけるガラスの東西交流」『考古学ジャーナル』464号　12-45頁。

真道洋子　2000b　「ラーヤ遺跡出土のガラス器」『財団法人高梨学術奨励基金平成11年度年報』51-62頁。

谷一　尚　1993　『ガラスの比較文化史』杉山書店。

東京国立博物館　1998　『宮廷の栄華　唐の女帝・則天武后とその時代展』ＮＨＫプロモーション。

新潟県立博物館　1999　『唐皇帝からの贈り物』。

福岡市教育委員会　1992　「福岡市鴻臚館遺跡Ⅱ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第315集』。

家島彦一　1991　『イスラム世界の形成と国際商業-国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店。

家島彦一　1993　『海が創る文明　インド洋海域世界の歴史』朝日新聞社。

ヤマンラール水野美奈子　1999　「ウマイヤ朝、アッバース朝と諸王朝」杉村棟責任編集『世界美術大全集東洋編17　イスラーム』21-52頁　小学館。

由水常雄　1992　『世界ガラス美術全集』1-5頁　求龍堂。

真道洋子
中近東文化センター
Yoko SHINDO
Middle Eastern Culture Center in Japan